

山家悠紀夫 『日本経済 30 年史 バブルからアベノミクスまで』 岩波新書 2019 年

第 4 章 橋本「構造改革」政策の実施とその破綻(1997~2000 年)

1 橋本内閣の「6 つの改革」 81

- ・ 橋本首相が、97 年 1 月、国会の施政方針演説で打ち上げたのが「6 つの改革」
- ・ 財政構造改革、教育改革、社会保障構造改革、経済構造改革、金融システム改革、行政改革
→前年 11 月の第 2 次橋本内閣発足時の「5 つの改革」に教育改革を付け加えたもの

2 「改革」がもたらした景気下降 83

○景気の動き

- ・ 1993 年 11 月から上昇へと向かい始めていた景気は、97 年 5 月をピークに下降に転じる

○GDP 実質成長率の動き

- ・ 96 年：3.1%→97 年：1.1%
→97 年は 96 年を上回る成長が期待できる状況にあったが、逆に下回るようになった

○経済成長への寄与度

- ・ 民間需要の寄与度の低下(96 年：2.6%→97 年：0.5%、2.1 ポイント↓)
→民間消費支出と住宅建設の寄与度の低下が大きい(あわせて 97 年は 96 年比 1.6 ポイント↓)
⇒財政構造改革の一環として、①所得税・地方住民税の特別減税の廃止、②97 年 4 月からの消費税率引き上げ(3%~5%)との影響によるもの
- ・ 公的需要も 96 年のプラス寄与(0.9%)から 97 年マイナス寄与(マイナス 0.4%)へと大きく低下
⇒財政構造改革による歳出抑制、とりわけ公共投資削減の影響

97 年 6 月に始まる景気下降は、「財政構造改革」という『「改革」がもたらした景気下降』

●アジア通貨危機の発生 85

- ・ 1997 年 7 月にアジア通貨危機が発生→アジア諸国向け輸出の減少という形で日本経済に影響
- ・ 一国(タイ)からの外国資本の流出が他の国々にも飛び火
⇒アジアの国々の通貨は大きく下落

●株価が下落、そして「金融危機」へ 86

○日経平均株価

- ・ 1989 年末：3 万 9000 円→92 年末：1 万 7000 円→94 年末：2 万円→96 年末：1 万 9000 円→
97 年末：1 万 5000 円→98 年末：1 万 3000 円
⇒92 年末以降景気回復を受け、96 年末まで 3 年間は小康状態にあったが、97 年に景気下降
⇒景気の下落と株価の再度の下落という状況下で「金融危機」が発生
⇒「金融危機」と同時に多くの金融機関による「貸し渋り」「貸し剥がし」が生じ、さらに景気を下降させる

3 金融危機の発生、「貸し渋り」「貸し剥がし」 87

●金融危機の発生

- ・ 1997 年は年初から株価の下落が続いたが、そこで目についたのが銀行株の下落
- ・ 準大手証券会社の三洋証券が、コール市場で資金調達ができず、経営破綻

○「貸し渋り」「貸し剥がし」の背景

- ① 経営が不安視された多くの金融機関で、預金が引き出され、加えて短期金融市場での資金調達もままならなくなって貸出に回す資金が枯渇した <資金繰り>
- ② 93 年 4 月から実施されていた自己資本比率規制(BIS 規制)の下でいくつかの金融機関が貸出が増やせない状況に立ち至った
⇒「貸し渋り」「貸し剥がし」は BIS 規制がもたらした結果

●戦後初、2 年続けてのマイナス成長 81

- ・ 98 年の実質成長率はマイナス 1.1%、99 年はマイナス 0.3%
→2 年続けてのマイナス成長は戦後初、大銀行が経営破綻をきたしたのも戦後初
- ・ 97 年から 98 年にかけての景気の落ち込みは戦後最大級
→「改革」がもたらした不況と同時に、「改革」が深化させた不況

4「改革路線」の修正による景気回復 92

- ・「改革」の実行よりも景気の立て直しが必要

○景気の立て直しに必要なこと

- ① 日本経済を金融危機から脱出させること
 - ② 財政政策、金融政策を総動員して景気の下降に歯止めをかけること
- ⇒6 つの改革のうち 2 つの精神に反する政策をとらなければならないということであり、改革の修正、もしくは中断が必要
- ・ 自ら「経済再生」内閣と名乗った小渕内閣の下、景気は徐々に回復へと向かう
→99 年実質成長率はなおマイナスだったが、2000 年は 2.8%のプラス成長
- 「改革」がもたらした不況は、「改革」が深化させた不況は、「改革」政策を修正することによって乗りきることができた

5「理想はアメリカ」、再び「構造改革」路線へ 97

- ・「改革」の失敗を目の前にしても、財界、政府、学者、マスコミ等は「改革が必要」と主張

●「経済戦略会議」1999 年 5 月の答申

- ・ 日本の「構造改革」のお手本は、アメリカ いい部分だけを見て
- ・ 当時のアメリカ経済は好調だったが、先進国のうちで国民が最も貧しい国であった
- ・ 90 年代のアメリカでは、経済が繁栄する傍らで、人々の暮らしはひどいものになっていた
⇒「経済戦略会議」のメンバーには前者は見えていても、後者は見えていなかった、あるいは見えていても重大なこととは思えなかった